

# 後期フッサールにおける

## 生活世界のアприオリ性

堀 栄 造

後期フッサールの現象学において「生活世界」は重要な位置を占めるものであるが、その概念の意味および意義は甚だ曖昧であり、とりわけ「危機書」<sup>(1)</sup>における「生活世界の存在論」の意味と意義の曖昧性は難解な問題を蔵している。それゆえ、本稿は「危機書」における「生活世界の存在論」の意味と意義を解明することを目指す。我々はその解明の鍵を「生活世界のアприオリ性の意味と意義」に関する考察に見出すであらう。

さて、これからの考察の手順として、我々は先ず「危機書」における「生活世界の意義の主題的変更」に眼を向け、それとの関連においてアприオリの分類および諸アприオリの中での生活世界的アприオリの位置づけを試みよう。そして次に、生活世界的アприオリの他のアприオリとの連関の問題の考察を進めながら、生活世界的アприオリの意味と意義を明瞭化してゆこう。そして最後に、それまでの生活世界的アприオリへの分析的考察の成果を踏まえて、「危機書」における「生活世界の存在論」が如何なる学を要請するものであり、その学の意味と意義は何であるのかを究明しよう。

### 一 生活世界の意義の二重性

後期フッサールの現象学における「生活世界」の概念は「危機書」において二重の意義を負っている。この二重の意義こそ後期フッサールの現象学の学的構造上極めて重要な問題を孕むものであり、我々はこれからそれを解き明かしてみなければならぬ。

フッサールによれば、ギリシアに生まれた新しい人類（哲学的人類、学的人類）は、「客観的真理」の理念に全認識に対する規範というより高い尊厳を与えるべく促されていることに気づき、それと関連して、全可能的認識をその無限性のままに包括する普遍学なる近代の指導理念が生じたが、そもそもこうした理念は、自然的生活の「認識」とか「真理」という目的理念をつくりかえてつくり出されたものであるから、学の客観的妥当性と全課題を解明するためには、差し当たり予め与えられてある世界へと問いを遡らせねばならぬ。<sup>(2)</sup>

かくして、予め与えられてある世界としての生活世界が「学的な

普遍的な課題」として立てられるのは先ず以て「諸学問の基礎づけ」という文脈においてであり、生活世界は「危機書」において先ず以て「学問論的文脈における主題」としての意義を担うのである。

しかしながら「危機書」における諸論の展開の中途において、客観的科学の明証的な基礎づけに対する生活世界の機能という一般の問題に先立ち、この生活世界がその中で生きている人間に対してもっている固有の恒常的な存在意味を問うべきであることを理由に、一変して「生活世界の存在様式の問題」が立てられ、「生活世界の固有の存在様式」が考察されることとなる。<sup>(3)</sup>そして、「生活世界の固有の存在様式」への問い、すなわち「生活世界の存在論」は、超越論的現象学的還元を通して超越論的領野を開示する上での手引とされる。ここにおいて「生活世界」は「超越論的文脈における主題」としての意義を担うのである。

「超越論的領野の開示」という文脈において「学的な普遍的な課題」として立てられることになる生活世界は、まさに「危機書」における諸論の展開の中途において、「学問論的基礎づけの文脈における主題」としての意義から「超越論的領野の開示の文脈における主題」としての意義へと「意義の主題的変更」を被るのである。

したがって、生活世界を主題化する際の、学問論的基礎づけにおける観点と超越論的領野の開示における観点との「危機書」における異なる二つの観点の存在を銘記しておかねばならない。そして、両観点の各々を考慮すれば看取されるように、「学問の世界↕生活世界」という連関と「生活世界↕超越論的世界」という連関との異なる二つの構図もまた把握されねばならない。それゆえ、世界

内部的現象学においてであれ超越論的現象学においてであれ、それら各連関の考察において「アプリオリな連関」が問題にされるとき、「学問的世界」・「生活世界」・「超越論的世界」の各々に対応して三つのアプリオリ、すなわち「客観的論理的アプリオリ」・「生活世界的アプリオリ」・「超越論的アプリオリ」が識別されねばならないであろう。

かくして、学問論的基礎づけという問題圏から超越論的領野の開示という問題圏への転換に伴う「生活世界の意義の主題的変更」は、「転換」の観を呈しつつも「連関性」の保持を認めるとすれば、その連関性を支えうるものは「三つのアプリオリ相互間の連関性」に他ならない。

では一体、フッサールの「危機書」における諸論の展開において、学問論的文脈と超越論的文脈とを「接続」せしめうるアプリオリ性とは如何なるものか。我々は「学問論的文脈」におけるアプリオリと「超越論的文脈」におけるアプリオリとを考察し、両文脈におけるアプリオリの比較・検討を通じて、アプリオリ性の解明を図るとともに「生活世界的アプリオリ」を巡る問題を深く問い進めてゆかねばならない。

## 二 存在論的アプリオリとしての 生活世界的アプリオリ

「危機書」がヨーロッパ諸学の危機を主張し、それを踏まえて超越論的現象学の必然的要請を論述するものであるかぎりにおいて、先ず以て超越論的現象学的還元以前のいわゆる平面の次元<sup>(4)</sup>における

学問論が考察されねばならない。すなわち、学問論的文脈における生活世界の問題が考察されねばならない。

学問論の問題領域は客観的科学における思考と直観との関係を基軸にして回転する。つまり、一方の側には論理的思想の思考作用としての論理的思考、例えば物理学の理論の物理学の思考や、体系としての数学、理論としての数学がそこに座を占めるような純粋に数学的な思考があり、他方の側には理論に先立つ生活世界のものとしての直観や直観されたものがあるという二極構造が学問論の根底に横たわっている。こうした「直観と思考の分離」は同時に「直観に基づいて形成される生活世界と論理的思考に基づいて形成される客観的科学との分離」であるが、逆にそこから両者の連関という課題が不可避免的に提示される。

そもそも客観的科学が客観性という目標設定によって純粋な生活世界<sup>(6)</sup>を越える客観主義的学問的理論を構築するとき、このような超越は既に生活世界の主観的相対性の克服という意図を孕んでおり、客観的科学と生活世界とは客観的なものと主観的なものという知識論的に対比的な意味を担いつつ、客観的科学の由来からして連関せざるをえないのである。

それでは、主観的相対的生活世界と客観的科学とは如何にして本質的に連関しうるのか。この問いに端的に答えれば、その連関は両者のアプリオリな構造およびそれらの連関によって可能となる。生活世界はその全き相対性のうちにありながらやはりそれなりの普遍的な構造をもっている<sup>(7)</sup>とフッサールによって語られる生活世界こそ「アプリオリな構造」を有するのであり、その生活世界のアプリオリ

な構造を基礎構造として客観的諸科学の論理的なアプリオリな構造が成立しうるのである。フッサールによれば、あらゆる客観的アプリオリも遡ってそれに対応した生活世界的アプリオリと必然的な関係をもつという点で生活世界に帰属するのであり、また逆に、この生活世界のアプリオリに基づいて理念化作業の間接的理論的成果として客観的アプリオリが成立する<sup>(8)</sup>。

以上の事から明らかなように、フッサールの基本的洞察は、客観的論理段階の普遍的アプリオリ——数学的ならびに他のすべての普通の意味でのアプリオリな諸学のアプリオリ——は、それ自体それに先立つ普遍的アプリオリ、すなわちまさに純粋生活世界のアプリオリに基づいているということである<sup>(9)</sup>。

しかし、主観的相対的生活世界と客観的科学との連関を可能ならしめるものとしての、相互に連関すべき生活世界的アプリオリと客観的論理的アプリオリとの間には、連関の可能的条件としての両者に共通な性格が存しなければならない。

では一体、生活世界的アプリオリと客観的論理的アプリオリとの両者に共通な性格とは何か。そもそも学問論的文脈において生活世界が如何なる意義を担うのかといえ、生活世界は「学問論的基礎づけ」における「妥当性の基底」としての意義を担うのである。論理的思考を介して形成される客観的科学は、自らの妥当性の根拠を求めて、直観を介して形成される生活世界へと遡行する。この場合に生活世界が妥当性の基底となりうるのは「存在論」的意味においてである。すなわち、学問論的文脈において、生活世界は、客観的科学に対して「存在妥当性」を保証するものとして、「存在意味」

を基礎づけるものとして、「妥当性の源泉」かつ「意味基盤」たりうるのである。それゆえ、客観的論理的アプリオリと生活世界的アプリオリとの連関は「存在論」的な連関であり、「存在論的アプリオリ」という性格こそ生活世界的アプリオリと客観的論理的アプリオリとの両者に共通のものである。また、ここで存在妥当性と言うも存在意味と言うも、超越論的現象学的還元以前の次元においてのことであり、ここで言及される「存在論的アプリオリ」は飽く迄も「世界内部性」を帯びたものであることを銘記しておかねばならない。

### 三 生活世界的アプリオリと

#### 超越論的アプリオリとの連関

「客観的論理的アプリオリ⇄生活世界的アプリオリ」という基礎づけの連関の構図における生活世界的アプリオリは、超越論的現象学的還元以前の次元としての平面の次元において存在論的アプリオリとして理解されうるが、超越論的文脈における奥行の次元で理解されるべきものとしての超越論的アプリオリとの連関において考察されるとき、生活世界的アプリオリの概念の意味と意義に関して問題が孕まれているように思われる。

ここで、フッサールの超越論的現象学を支える根本構図に立ち返ろう。それは第一段階として、客観的論理的アプリオリと生活世界的アプリオリとの連関であり、第二段階として、生活世界的アプリオリと超越論的アプリオリとの連関である。この二段階を経由して世界内部的次元を介する形で超越論的次元としての普遍的領野が開

示され、また逆に超越論的機能としての奥行の生の開示によって、客観的科学および純粹な生活世界と連繫するものとしての平面の生が確固として基礎づけられる。しかし、第一段階から第二段階への移行の際に両段階の連結点としての役割を果たす生活世界的アプリオリの概念の意味と意義が問題である。

フッサール自身、自らの生活世界的存在論のアプリオリを伝統的な意味での学のアプリオリと峻別している。すなわち、客観的諸科学に關していえばそれ自体において真なる世界という構築された概念、また少なくとも自然に關しては数学的形式のうちに基礎をもつ世界という概念によつて導かれてゐる近代哲学の、アプリオリな学という近代哲学的概念、結局は普遍数学（論理学、論理計算）という概念は、それが好んで自らのために要求するところの眞の明証性という尊嚴、つまり直接的な自己所与性（經驗的直観）から汲み取られた学という尊嚴をもつことはできないとされる。<sup>(10)</sup>そしてそのことによって、伝統的な意味での学としての近代哲学的なアプリオリの概念とは異なるものとしてのアプリオリの概念を担う生活世界的存在論が、直接的な自己所与性（經驗的直観）から汲み取られた学という尊嚴を有するのだ、ということが示唆されるのである。したがって、生活世界的存在論のアプリオリは存在論的に根源的な、いわば「直接的アプリオリ」と呼びうるのに對し、それを基礎にして初めて構築可能な客観的論理的アプリオリは存在論的に二次的な、いわば「間接的アプリオリ」と呼びうるものである。それゆえ、存在論的アプリオリのうちでも生活世界的アプリオリは根源的で直接的なものであると言わなければならない。ここにおいて、生活世界

的アブリオリが存在論的アブリオリの圏内において独特の意味と意義を担うことは明白であるが、生活世界の存在論が自然的態度のまま「生活世界の不変の構造」<sup>(11)</sup>としての「純粋なアブリオリとしての方法的に把握されうる本質類型」<sup>(12)</sup>を問うものであるかぎりにおいて、生活世界の存在論は平面の次元を越え出ることはない。だとすれば、自然的な基盤に立っての、したがって超越論的な関心の地平の外にある生活世界の存在論が、超越論的領野と如何にして関連しうるのか。そしてその関連における生活世界的アブリオリの意味と意義が問題である。

フッサールによれば、生活世界は超越論的哲学の文脈においては単なる超越論的「現象」へと変化し、生活世界の固有の本質においては以前あったとおりのままだが、具体的な超越論的主観性の中の単なる「構成分」となり、それに応じてアブリオリは超越論的なもののもつ普遍的アブリオリの中の一つの「層」ということになる<sup>(14)</sup>。しかし、生活世界が単なる超越論的現象へと変化する超越論的文脈において、生活世界的アブリオリの概念も同時に共にその意味と意義を変えるのではないのか。

超越論的文脈における生活世界的アブリオリは、超越論的なもののもつ普遍的アブリオリの中の一つの層を成すのだとすれば、平面の次元における存在論的アブリオリと区別されるものとして「超越論的アブリオリ」と呼ばれるべきであろう。それゆえ、平面の次元から奥行の次元への移行の転換点における生活世界的アブリオリは、存在論的アブリオリと超越論的アブリオリとの「二重の意味と意義」を帯びる。

以上のような事を踏まえて言えば、フッサールは、生活世界的アブリオリという術語を用いる際に、平面の次元から奥行の次元への移行の転換点における生活世界的アブリオリという概念の二重性を曖昧なものにしている。つまり、フッサールは、存在論的次元においても超越論的次元においても生活世界的アブリオリという単一の術語の使用で済ましているのである。生活世界は超越論的現象へ変化しようともその固有の本質においては変化しないとフッサールによつて述べられるとき、平面の次元においては世界内部的である存在論的アブリオリとしての生活世界的アブリオリと、奥行の次元において超越論的である超越論的アブリオリとしての生活世界的アブリオリとの識別の顧慮がフッサールには欠けていたように思われる。やはり、存在論的次元と超越論的次元との両次元における生活世界的アブリオリの概念の意味と意義は、飽く迄も明確に識別されねばならない。またそうして初めて、平面の次元と奥行の次元との両次元における生活世界的アブリオリの二重性としての、存在論的アブリオリと超越論的アブリオリとの両者の関連も明瞭になりうるであろう。

超越論的文脈における二つのアブリオリの関連、すなわち超越論的主観性の能作のアブリオリとしての「ノエシス的アブリオリ」と、超越論的現象たる生活世界的アブリオリとしての「ノエマ的アブリオリ」との関連は、無論「超越論的アブリオリ」という共通の性格を有するものの関連でなければならないが、奥行の次元たる超越論的次元に位置づけられた超越論的アブリオリとしての生活世界的アブリオリと、平面の次元たる存在論的次元に位置する存在論的アブリオリと、

リオリとしての生活世界的アプリオリとの連関は如何なるものか。超越論的アプリオリとしての生活世界的アプリオリと存在論的アプリオリとしての生活世界的アプリオリとの連関の問題こそ、学問論的文脈と超越論的文脈との、そして存在論的次元と超越論的次元との連関を解明する上での核心的な意味をもつものであろう。

#### 四 アプリオリ概念の

##### J・N・モハンティによる分析

存在論的アプリオリとしての生活世界的アプリオリと超越論的アプリオリとしての生活世界的アプリオリとの両者は相互に如何なる関係にあり、それぞれ如何なる意味と意義を背負わねばならないのであろうか。この問題への考察へと進まねばならないが、ここでJ・N・モハンティの論究、すなわち、アプリオリな生活世界概念および客観的アプリオリや主観的構成的アプリオリに対するその関係を査定することをその課題の一つとする論究を参照することは有益であらう。

J・N・モハンティは、「超越論的アプリオリ」に相当するものを「構成的アプリオリ」と呼んでいるが、彼は存在論的アプリオリと構成的アプリオリの意味と意義に関して如何なる見方を呈示するであらうか。

J・N・モハンティは、先ず以て存在論的アプリオリや構成的アプリオリと密接な関係にある二つの生活世界概念を掲げる。一つは主観にとって曖昧に相対的に知覚されるものとしての生活世界であり、それは「LW1」と命名される<sup>(16)</sup>。他はその内であらゆる他の世

界が構成され与えられる地平として他の世界の可能性の条件を成す生活世界であり、それは「LW2」と命名される<sup>(17)</sup>。そして、J・N・モハンティの重要な問いは、LW1とLW2のこれら二つのもののいずれが、理念化作用に基づいてはたらくと想定される基盤であるのかということである<sup>(18)</sup>。

生活世界を基盤として理念化の過程が辿られるためには、生活世界は理念化が基づくほんやりとした典型性 [typicality] と類型 [type] をもたねばならないだろう。したがって、そのような典型性や類型を含む生活世界の経験は、純粹に直観的なレベルでの曖昧な型式 [pattern] の熟知、フッサールが曖昧な典型性および常習性 [habituality] と呼ぶもの<sup>(19)</sup>、そしてそういう意味での型 [style] によって特徴づけられよう。J・N・モハンティによれば、理念化という人間の活動が何らかの理念化されたものに達しようということは、生活世界の経験そのものが単に等質的な流れないし一連の原子的諸印象であるのではなく、理念化の活動が達しうるものに先んじるほんやりした典型性の把握を内に含むものであることを要請するものである<sup>(20)</sup>。このような生活世界における曖昧な類型の有するアプリオリこそ根源的で直接的な存在論的アプリオリであり、それに基づいて二次的で間接的な存在論的アプリオリたる客観的論理的アプリオリが成立する。こうしたアプリオリな構造連関は平面の次元における形相の本質を探究する存在論的圏域のものであり、その開示は世界内部的現象学の業務としての「生活世界の存在論」に委ねられねばなるまい。

かくして、世界内部的現象学の分析対象たる生活世界に関して、

J・N・モハンティは、「生活世界がアプリオリな構造をもっている」と言うことと「生活世界がその構造をもっている」と言うこととは同じことではない<sup>(23)</sup>としている。これはJ・N・モハンティが構成的アプリオリとしての生活世界の構造と存在論的アプリオリとしての生活世界の構造とを区別するからで、J・N・モハンティは生活世界的アプリオリという術語の使用を構成的アプリオリの意味に局限しようとするからである。したがって、J・N・モハンティによれば、それに基づいて諸論理形式が成立する「原—論理的構造」としての存在論的にアプリオリな諸構造は最も十全な意味において「経験的」であり、それらの構造は生活世界的アプリオリと呼ばれてはならない<sup>(24)</sup>。

それゆえ、前掲の問い、すなわちLW1とLW2とのこれら二つのもののいずれが、理念化の作用がそれに基づいてはたらくと想定される基盤であるのかという問いに対して、J・N・モハンティは無論LW1の方だと答える。J・N・モハンティによれば、LW1は十全に経験的であり、その原型および類型はすべて経験的であり、LW1の経験はいつも苟も如何なる世界でもその内で経験されうる普遍的地平としてのLW2の前以て与えられていることを前提しており、LW2は如何なる経験の一般的類型をも予め規定する一連のアプリオリな構造から成っている<sup>(25)</sup>。さらにまたJ・N・モハンティによれば、フッサールに従えば、空間・時間性、歴史性、人間を中心とした周辺の方角づけ、地平的性格として理解された開放性、受動的な観念連合の総合という性格は、疑いもなくLW2のアプリオリな構造に属する。しかしながら、これらのどれ一つとして確実

な完全に明確な形式の厳密に理念化された意味において理解されない。それらの曖昧さにもかかわらず、それらは世界経験としての如何なる世界経験の一般的構造をも表している<sup>(26)</sup>。

J・N・モハンティは、以上のようなLW1とLW2との峻別を踏まえた上で、生活世界概念に関するフッサールの困難について次のように指摘する。つまり、フッサール自身の詳述は、LW1とLW2との間を、それゆえ前者を特徴づける（それとともに形相的領域的存在論の理念化を通しての生成にとつての基盤を形づくる）「固定された類型の機構」と後者の「アプリオリな不変な構造」との間を、区別しないことによって苦しんでいるということが疑いもなくある<sup>(27)</sup>、と。

以上見てきたことから、J・N・モハンティは存在論的アプリオリと構成的アプリオリの意味と意義に関して如何なる見方を呈示するのかという前掲の重要な問いに対して、我々は次のように答える。すなわち、J・N・モハンティは、存在論的次元における本質および本質構造に関するアプリオリを「存在論的アプリオリ」とみなし、超越論的次元において存在論の本質の法則を基礎づけるものとしての範疇に関するアプリオリを「構成的アプリオリ」とみなすのである。超越論的主観性に属する固有のアプリオリとしての構成的アプリオリのみが自己を基礎づけるものとして真にアプリオリの名に値するものであり、存在論的次元における本質および本質構造に対する範疇として原理たる意義を担うのである。フッサールのアプリオリの基本概念の諸特徴の綿密な分析を通して存在論的アプリオリと構成的アプリオリとの峻別という成果をもたらしたJ・N・

モハンティの考察は高く評価されるべきであり、しかも、LW1とLW2という二つの生活世界概念の峻別および両生活世界概念の存在論的アブリオリや構成的アブリオリとの関係についての考察を介して存在論的アブリオリと構成的アブリオリとの峻別が一層明瞭となり、さらに、生活世界的アブリオリの二重性、つまり存在論的アブリオリとしての生活世界的アブリオリと構成的アブリオリとしての生活世界的アブリオリという二重性の意味と意義が浮き彫りにされたところにJ・N・モハンティの論究の意義深い穿ちがある。

しかし惜しむらくは、J・N・モハンティの考察においては、学問論的文脈から超越論的文脈への転換における、峻別さるべき二つの生活世界的アブリオリの連関という問題が、存在論的アブリオリと構成的アブリオリとの峻別という問題圏域に胚胎されたまま論究をみないのである。明瞭に峻別された存在論的アブリオリとしての生活世界的アブリオリと構成的アブリオリとしての生活世界的アブリオリとの相関という問題は、超越論的現象学的還元への道において存在論的次元と超越論的次元との連関の問題の核心を成すものであるが、この枢要な位置を占めるべき問題は後期フッサールの現象学における「形相的現象学」の位置づけやその学の意味および意義の問題への考察を必然的に要請するものである。

## 五 形相的現象学の位置づけとその学の意味および意義

学問論的文脈から超越論的文脈への転換点に生活世界が位置を占め、生活世界の固有の存在様式への問いとしての生活世界の存在論

が「危機書」において要請されるのであるが、この生活世界の存在論の二重の意味と意義はもはや明白である。すなわち、学問論的文脈において、生活世界の存在論とは原—論理的構造としての意義を担うとともに存在論的アブリオリを有する「生活世界における類型」を探究するものであり、超越論的文脈において、生活世界の存在論とは超越論的主観性の能作を開示するための超越論的端緒としての意義を担うとともに超越論的アブリオリを有する「生活世界のノエマの意味」を探究するものである。

それゆえ、フッサールが「危機書」において生活世界に超越論的手引としての機能を見出して生活世界の存在論に超越論的意義を担わせるとき、もはやその生活世界の存在論は学問論的文脈における世界内部的存在論ではありえず、超越論的文脈における超越論的存在論であるはずである。

超越論的存在論としての生活世界の存在論は超越論的現象と化した生活世界のノエマ的分析を為すものであり、それを介して初めて相關的に超越論的主観性の能作の開示としてノエシス的分析が可能となる。したがって、超越論的次元におけるノエシスの開示に際して、ノエシスと相関するとともにノエシスと同様に超越論的アブリオリを有するノエマとしての生活世界の超越論的存在論が、超越論的領野において先ず以て存立せしめられねばならない。

そこで、生活世界の超越論的存在論が如何なるものであるかというところが問題になるが、この生活世界の存在論が超越論的次元に打ち立てられて超越論的領野の一角を成すものであるかぎり、それは超越論的現象学的還元の後続し従属しなければならない。それゆえ、



生活世界の超越論的存在論は、超越論的現象学的還元を通じて超越論的現象と化した生活世界の形相的還元を遂行する「形相的現象学」に他ならない。

したがって、後期フッサールの現象学における超越論的存在論としての形相的現象学の位置づけは、超越論的手引として機能すべきである超越論的現象たる生活世界が立てられる場としての超越論的領野の開示の序開きにおいて為されねばならない。そして、この生活世界の超越論的存在論としての形相的現象学は、超越論的領野の開示の端緒であるとともに、存在論的次元と超越論的次元との連関の際の超越論的次元の側の窓口としての役割を果たす。何故なら、生活世界の超越論的存在論としての形相的現象学が遂行する生活世界のノエマ的分析は、平面の次元における世界内部的存在論としての生活世界の存在論と連関するであろうからである。すなわち、超越論的存在論としての生活世界の存在論と世界内部的存在論としての生活世界の存在論との間には、超越論的な興行の次元と存在論的な平面の次元との相連に基づく異質性はあるにせよ、超越論的な生活世界的アプリオリと世界内部的な存在論的アプリオリとの相関が成立するのである。

超越論的存在論としての形相的現象学は超越論的存在論的アプリオリ（ノエマ的アプリオリ）に携わるのであるが、他方、世界内部的存在論的アプリオリに携わるものとして世界内部的存在論としての形相的現象学もまた考えられねばならない。かくして、生活世界の超越論的存在論としての形相的現象学によって世界内部的存在論的本質構造が開示されるのであるが、両者は相互に並行関係にあり、

超越論的態度をとるか自然的態度をとるかに応じて相互に移行可能な関係にある。したがって、世界内部的存在論的本質構造の存在論的アプリオリは、超越論的還元を経ることによってノエマ的構造の超越論的アプリオリと連関するものと言えるのである。

ゆえに、生活世界の存在論を通じて超越論的現象学的還元へと至る道において出発点となる平面の次元における世界内部的存在論としての生活世界の存在論は、世界内部的な形相的現象学の業務として遂行され、生活世界の超越論的存在論としての超越論的な形相的現象学との連関を介して超越論的領野の開示の端緒となりうる。すなわち、世界内部的存在論の根底に据えらるべき「世界内部的な形相的現象学」と超越論的領野の門口に樹立さるべき「超越論的な形相的現象学」との連関こそ、平面の存在論的次元と興行の超越論的次元との連関を可能にするものである。

以上のような考察からして、後期フッサールにおける生活世界のアプリオリ性は、世界内部的存在論的本質構造の有する世界内部的存在論的アプリオリと超越論的意味構造の有する超越論的アプリオリとの二重性を帯びているのであり、したがって必然的に、異次元性を保持しつつも超越論的現象学的還元を介して連関する二種類の形相的現象学を要請するものである。

## 注

- (1) E・フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』[HUSSELIANA BAND VI, DIE KRISIS EUROPÄISCHEN WISSENSCHAFTEN UND DIE TRANSZENDENTALE

PHÄNOMENOLOGIE』の略号<sup>90</sup> 以下「KRISIS」という略記も使用する。

- (2) Vgl. KRISIS, S. 124.
- (3) Vgl. *ibid.* S. 125, 126.
- (4) 「平面の次元」とは素朴に世界に向かいながら世界生活を営む人間の生としての「平面の生」[Flächenleben]の次元である。またこれに対し、超越論的現象学的還元を通じて開示されるものである「超越論的生」としての「奥行の生」[Tiefenleben]の次元が「奥行の次元」である。
- (5) Vgl. KRISIS, S. 137.
- (6) KRISIS, S. 51 で「幾何学的な、また自然科学的な数学化の場合には、我々は、無限に開いた可能的経験のうちにある生活世界——我々の具体的な世俗生活の中で絶えず現実的なものとして与えられている世界——に、いわゆる客観的科学の真理とどうびつたり合った理念の衣 [Idenkleid] を合わせて着せるのである。」と述べられているが、理念の衣を剥ぎ取られた理念化以前の世界が、<sup>91</sup> ここで言われる「純粋な生活世界」である<sup>92</sup>。
- (7) KRISIS, S. 142.
- (8) Vgl. *ibid.* S. 143.
- (9) *ibid.* S. 144.
- (10) Vgl. *ibid.* S. 177.
- (11) *ibid.* S. 176.
- (12) *ibid.* S. 176.

- (13) *ibid.* S. 176.
- (14) Vgl. *ibid.* S. 177.
- (15) J. N. MOHANTY: *Life-world and A Priori in Husserl's Later Thought*, in: *Analecta Husserliana, The Yearbook of Phenomenological Research Volume III*, 1974, P. 51.
- (16) 「LM」とは *Life-World* (生活世界) の略号である。<sup>93</sup> 「N・モハンティ」の前掲論文 cf. p. 56.
- (17) cf. *ibid.* p. 57.
- (18) cf. *ibid.* p. 60.
- (19) 「危機書」において存在論的文脈の中でこれらの術語が用いられている例をいくつか拾い上げてみると、以下の通りである。<sup>94</sup> 「類型的」[typisch] (KRISIS, S. 28) 「直観的自然の具体的な総体的類型 [die konkrete Gesamttypik der anschaulichen Natur]」(KRISIS, S. 40) 「人間の生と人間的習慣性の特殊な形態 [Besonderheiten menschlichen Lebens und menschlicher Habitualitäten]」(KRISIS, S. 141 Fußnote) 「確固とした類型」[eine feste Typik] 「本質類型 [Wesenstypik]」(KRISIS, S. 176) 「生活世界の最も一般的構造には次のことが属している。それはつまり、物体とどうものはそのしかじかであるあり方のいわば習慣 [Gewohnheiten] をもっているということ、<sup>95</sup> そして物体は——顕在化可能な諸属性が相互に連関し合うための——よく知られた類型 [Typus]、あるいはもしその物体が我々にとって『新しい』ものであるならば学び知らざるべき類型 [Typus] において存在しているということ、<sup>96</sup> である。」(KRISIS, S. 221

FuBnote)「領域的類型 [regionale Typik]」 KRISIS, S. 230) 等々。

(20) J・N・モハンティの前掲論文 cf. p. 58.

(21) J・N・モハンティは、類型によって特徴づけられる自らのLW概念をより明確にするために、他の二つの前概念的直接的経験の概念との対比において論じている。その二つの前概念的直接的経験の範型 [model] として、前概念的経験がその範型にしたがって原子的な関係のない離ればなれの諸印象に存するところのヒュームの範型と、前概念的経験を内的と外的との区別の全く無い知覚力のある経験の等質的全体ないし流れとみなすジェームズ・ブラッドレイの範型を挙げ、それから進展する高次の理念化を説明するには不十分だとして両者を共に批判している。(J・N・モハンティの前掲論文 cf. p. 59)

(22) J・N・モハンティの前掲論文 cf. p. 59.

(23) cf. ibid. p. 61.

(24) cf. ibid. p. 61.

(25) cf. ibid. p. 61.

(26) ibid. p. 61.

(27) ibid. p. 61, 62.

(ほり・えいぞう 筑波大学大学院哲学・思想研究科在学中)